

個別共同研究

『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂共同研究

『絵引』から *Pictopedia* へ 次の三年間

ジョン・ボチャラリ (非文字資料研究センター 研究員 / 研究班代表)

神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の成果の一つは、『絵巻物による日本常民生活絵引』(澁澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編)の英訳刊行であった。この *Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan* は「成果」といっても、当初の計画より大分縮小した成果であったと認めざるを得ない。予算は途中で削減され、また、新しい試みだけに試行錯誤の作業となり、思いのほか時間がかかったことを考慮すれば、全5巻の原文の『絵引』の内、最初の2巻のみの刊行にとどまったことを許してもらえないのではないかと思う。しかし、やはり、全訳ができなかったことが関係者全員の心残りである。

幸いなことに、昨年度終了したCOEプログラムの成果を更に発展させるため「非文字資料研究センター」が神奈川大学日本常民文化研究所付置の機関として設立された。『絵引』の全訳は継続的にこのセンターの企画となっている。本稿では、今までの経過を振り返りながらこれからの展望について考えてみたい。

翻訳事業そのものは実際にだれが訳すかということに

ついての重要な検討から始まった。選択肢としては、優秀な「プロ」の翻訳家を探し、その人に全訳を依頼するか、それともより「手作り」な作業にするか、という方法があった。前者の方が簡単であったに違いない。その場合、翻訳事業の担当であったCOEプログラム第1班の仕事は出来上がった翻訳原稿をチェックして、印刷業者に渡すだけのこととなっていたであろう。しかし、第1班は「手作り」の方を選んだ。なぜか？

『絵巻物による日本常民生活絵引』は日本常民文化研究所の貴重な遺産であり、財産である。なるべく愛情を持った関係者の手でやりたい、という気持ちは強かった。それに、COE事業の大事な意味の一つは次世代の研究者を育成することにあつた。神奈川大学内外の大学院生に『絵引』に触れる機会を与え、第1班と共にその国際的な意義を考え、海外の研究者に役立つように、という配慮で、「翻訳班」を立ち上げ、英訳に充てることにした。この「手作り」の道程は楽なものではなかった。

まず、人選が難しかった。原文の分量と大学院生の個人の学位論文などの都合を考え、複数の院生に依頼することにしたが、平安から中世にかけての日本の庶民文化

に関心があっても語学力がそれに追いつかないケースが多かった。しかし、時間をかけて探した甲斐があつて、強力なチームを組むことに成功した。(もっとも、数名の専門翻訳家にも頼らなければいけないこともあつた。)

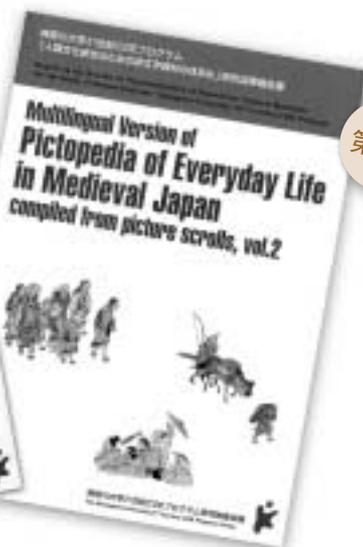
『絵引』の第2巻から作業が始まった。他の4巻と違って、第2巻は一つの絵巻(『一遍聖絵』)のみで構成され、一貫した内容であったため最初の試みとしてより作業しやすいと思われたからである。第2巻を5人の訳者に分割して、同時進

Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan

第1巻



第2巻



行の形で訳していった。しかし、「一貫した内容」とはいえ、5人の違った訳者による作業だったので一貫した英訳になりにくく、第1班の校閲員の一番難しい仕事は5様に訳された物の呼び名などを統一させることであった。その後第1巻の翻訳作業にかかり、COEプログラムが終了した2008年3月までに第1巻と第2巻を何とか刊行した。

第1班の心残りは全5巻の英訳ができなかったことだけではない。時間切れでテキストそのものには校正が十分でない箇所もあろう。英語のキャプションにはかなり気を配ったつもりであるが、中国語と韓国語のキャプションに関しては時間不足で校閲結果に自信がない。当初はフランス語のキャプションをも付ける予定であったが、そこまで手が回らなかった。また、英訳できない単語（例えば、「烏帽子」、「直垂」など）の辞書を作る作業はいまだ手つかずの状態である。

では、これからの展望はどうか？非文字資料研究センターの企画として、第1班の編纂員において次のようなことを考えている。

結論からいうと、これからの3年間の間に、『絵引』の残りの3巻の刊行を試みる、ということである。

そのために、まず、2008年度の仕事として、英訳スタッフを構成し、COEと同じく翻訳に取り掛かる。おそらく、今までの作業よりスムーズに行くはず、と楽観している。基本的な英語の呼び名はもう表になっているし、

要領が大分分かってきているからである。

英訳原稿ができるまでの間、「研究会」の形として、第1巻と第2巻を見直して、その反省点をこれからの編纂に生かせるようにしたい。できれば、「外部評価」でフィードバックを得たい。また、さっそく大学院生を中心に、先に触れた辞書の準備に取り掛かるようにしたい。フランス語キャプションなどの可能性も考えたい。第3巻の翻訳原稿が入り次第校閲し、なるべく早く刊行できるようにしたい。その後、徐々に第4巻と第5巻の訳、校閲、発行もできるようにしたい。

しかし、予算、著作権などのことで、第1班の裁量のみでは図れない課題もある。例えば、第1巻と第2巻は文部科学省の方針で無料配布になっていたが、これからは販売するかどうか。

第1巻と第2巻に付け加えて残りの3巻を出すか、それともセットとして再発行し、合わせて出すか。『絵引』英訳のCD-ROM化の形で出せるか。該当する部署と相談が必要となる。

聞いた話によれば、原文の『絵巻物による日本常民生活絵引』は思いのほか、海外の日本関係の大学院で使われているようである。願わくは、*Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan*も同様に広く役に立つものにしたい、というのは関係者全員の抱負である。

個別共同研究

関東大震災後の都市復興過程とそのデータベース化、並びに資料収集

関東大震災後の都市復興過程と そのデータベース化、並びに資料収集

北原 糸子（非文字資料研究センター 研究員 / 研究班代表）

本研究は21世紀COEプログラムにおいて課題とした「環境に刻印された人間の諸活動」(災害グループ)で実現させた「関東大震災・地図と写真のデータベース」をさらに充実、データ更新を行う。具体的には、「関東大震災・地図と写真のデータベース」が地図に関東大震災における延焼シミュレーションおよび被害・救済関係の写真を重ねデータ化したものの、その後の復興過程につい

てデータを重ねることはできなかった。

本研究では、経済学さらに都市工学を修め、関東大震災の民間における建築復興過程の個別具体的研究で博士号を取得した田中傑氏をセンター研究員、また1920～30年代の政治文化史を専攻、博士号を取得した高野宏康氏を研究協力者に迎えて、震災後の復興過程を総合的に捉える方法的開拓を行い、その成果のうちデータベース化